

一方、もし世界が永遠であるならば、実体と作用因のない、一つの永続的で変化しない存在が必然となる。結果的にどちらの場合も、神の存在、唯一性、非物質性が明らかになるのである。、それこそが私自身の望むことである。)

哲学者の議論の方法について、マイモニデスは第二部一章から三十一章にかけて述べており、一章では、第一部七十三章と同様、哲学者の論証の基盤となる二十五の諸前提を、アリストテレスの自然学と形而上学の議論に基づくものとして掲げている。ここで内容の詳細について言及することは控えるが、彼自身が本当に論じたかったと思われる議論は、本箇所において論じられたものと推察され、その意味において、今回取り上げた箇所を正しく理解するためには、第二部の議論について丹念に調べる必要があると考える。

最後に、方法的にはカラーミ的な議論を展開するマイモニデス自身がムタカッリムと言えるかどうかについて、レオ・シユトラウスは「マイモニデスの議論とカラーミの議論を分けるものは、知性と想像の根本的な違いについての彼の主張であって、彼は、ムタカッリムは想像と知性を取り違えていると断言している。すなわち、自然の事物と調和する明瞭な前提が必要であるにも関わらず、カラーミは真実だからではなく、教義の証明がし易いことで選んだ恣意的な前提から始めていると、彼は主張している」(Leo Straus, "The Literary Character of the Guide for the Perplexed," in *Persecution and the Art of Writing*, Chicago and London: University of Chicago Press, [1952] 1988, p. 40) と述べており、純粋に哲学的な方法論に

基づくことを旨としつつ聖書に基づく結論を是としたマイモニデスは、この意味ではムタカッリムとは言えないとも結論付けることが出来るであろう。

スーフィー文学における

シンボリズムとナータ・ヨーガ

榊 和良

『マドゥマラータイ』は、ヒンディー・スーフィー・カーヴィヤと呼ばれる一方で、インド・スーフィー・ロマンス叙事詩とも呼ばれるジャンルに属する一五四五年に書かれた東部ヒンディー方言(アワディー)の詩物語である。ジャンル名が象徴するように、モティーフやプロットの多くを先行するバヴァブータイの『マラータイマダヴァ』というサンスクリット戯曲や『カタールリットサーガラ』に収められたインドの説話、同じ東ヒンディー方言で著されたジャーエスイーの『パドマーヴァタイ』やクトゥバンによる『ムリガーヴァタイ』の影響を受け、インドの伝統的な物語・語りのスタイルと、ペルシア語の伝統的なマスナヴィー(詩物語)のシンボリズムと作為性を組み合わせた形を特徴とするとされる。

マンジャンは、主人公の王子マノーハルと王女マドゥマラーティーが「愛の道」をたどる物語を、「ラージャ・ラサの物語」「甘露(アムリタ)の物語」と呼んだ。この時代、このジャンルの物語詩が好んで依拠したヨーギンの修道論は、ペルシア語の

伝統的な詩物語のいかなるシンボリズムと組み合わせられて何を示そうとしているのか。

『マドゥマーラティー』が、王女マドゥマーラティーの頭の先から爪先までの理想的な美しさを描写するインドの恋愛物語詩の典型的な手法や、王子マノーハルとの別離の苦しみを十二カ月の自然の移ろいに合わせて描く手法を用いるところはヒンディー・カーヴィヤの名にふさわしい。だが、王子マノーハルがヨーギンの姿をとって愛するマドゥマーラティーを求める旅と、鳥に姿を変えられた王女マドゥマーラティーがマノーハルとの再会を求める旅を、著者が「愛の道」となづけ、夢の中の出会い、別離、再会、別離、再会、結婚、旅立ちまでの過程を、対称的な円環をなしつつもさまざまな角度で対応関係をもつ複雑な構造で描きだす姿は、恋愛物語詩を越えた抽象的な象徴に満ちた精神的叙事詩の名にふさわしい。

マンジャンは、インドのスーフィー教団の中でも、ナータ・ヨーガに通じたシャッターリー教団に属していた。その直接の導師は、自らナータ・ヨーガを実践し、ナータ・ヨーガ文献にも含まれる呼吸を観察する占術法や座法、タントラの女神の勧請法などを含む『甘露の水瓶（アムリタクンダ）』と題されるインドの言語で著されたという文献のアラビア語・ペルシア語訳である『生命の水槽（ハウドウル・ハヤート）』を、『生命の海（バフル・ハヤート）』と題して重訳したムハンマド・ガウス・グワリーアリーであった。マンジャンは、神の本質そのものであった自己が現象世界に下降し、「愛」の姿で世界に顕現している神の本質に出会い、再び上昇して自らの起源に戻る

っていくというシャッターリー教団の修道論をこの精神的叙事詩に描いた。

それを支えるイメージは、『生命の海』の枠物語として用いられた新約聖書の外典の一つ『トマス行伝』に含まれる『真珠の歌』と、中世イランの哲学者で照明学派の始祖、シハーブッディーン・スフラワルディー・アル・マクトゥールによる『愛の真実に関する論攷』のシンボリズムにある。マンジャンの「別離こそが人間の唯一の希望である」ということばには、人間が自己の起源への帰還を目指すことが自己を知ることであり、「自己を知るものは神を知る」というスーフィーの言葉に象徴される人間の救済を見出すことができる。それこそが、ナータ・ヨーガの目指す、サハジャ（最高實在）へのラヤ（消融）であり、聖典や論書からは学ぶことのできない実践により得られる叡智であった。

イスラーム的自然法論の意義と問題点

浜本 一典

自然法をめぐる議論は古代ギリシアで始まり、変遷しつつ今日まで続いている。伝統的な理解によれば、自然法とは、人間の自然的本性に合致し、普遍的妥当性を有する法であり、理性によって経験的に認識される。このような自然法の概念は一見、シャリーアという啓示法を擁するイスラームには馴染まないように思える。にもかかわらず、シャリーアと自然法的一致